

科学的生命観の史的再構成——科学はどこから道をまちがえたのか

東京大学大学院人文社会系研究科 小松美彦

本発表では、西洋の科学的生命観の歴史（タレスから現在まで）を演者なりの視座から大胆に再構成し、2600年間に及ぶ科学（自然学）と生命との関係を批判的に総括する——それらがハイデガーをめぐる討究の捨石になればと願っている。そこでまず、この要旨では、発表の背景をなす問題意識を示すべく、既存の歴史把握を批判的に検討しておきたい。

従来、科学的生命観の歴史は「機械論対生氣論」の歴史として把握するのが基本であった。「機械論」(mechanisme, mechanism, Mechanismus)とは、①生きものや生命現象を時代ごとの先端的な機械（噴水装置、時計、コンピューターなど）に喩え、②生命現象を自然現象一般と同一視し、③物理学・化学で説明できる、とするものである。他方の「生氣論」(vitalisme, vitalism, Vitalismus)とは、①生きものや生命現象を機械に喩えずに、②生命現象を自然現象一般とは異なるとし、③靈魂や生命力などの特殊原理を措定して把握するもの、と考えられている。かくて科学的生命観の歴史は、古代ギリシアから生氣論が連綿と続いたが、17世紀にハーヴィやデカルトの機械論が登場し、その後は両者が相克をなすも、最終的には機械論が勝利して現代に至る、概ねこのように描かれてきた。

しかしながら、一見説得的で、世界に蔓延してきたこのような歴史把握には、省みるべきことが幾重にも潜在するように思われる。以下、四点に絞って概説する。

第一は、そもそも「生氣論」という概念は19世紀前半に誕生したということである。したがって、それ以前は生氣論と機械論の対立など実在しようがない。たとえば18世紀には、医物理学派、医化学派、反医物理学・医化学派、これら三者間の論争が繰り広げられた。しかも「機械論対生氣論」なる歴史把握も、19世紀後半から、ヘッケル『一般形態学』（1866）、ベルナール『動植物に共通する生命現象』（1878）、ドリーシュ『生氣論の歴史と理論』（1905）などによって構築されたものに他ならない。彼らは古代からの諸論者を両陣営に二分し、この遡及的な把握が世界的に定着したのである。日本にあっては、昭和初期に丘英通らとその歴史把握を輸入し、やがて常識と化して今日に至るのである。

もっとも、かかる対立図式を方法論的に古代にまで遡及させることは可能ではあろう。だが、第二の問題として、その図式自体が難題を抱えている。たとえば、生きものを機械に準えるのは“機械論”に固有のことではない。デカルトの衝撃以降、18世紀の“生氣論者”も当の比喩を踏襲した。ただし、彼らにとって生きものは機械ではあっても、特殊

能力を備えた機械なのである。同様に、“生氣論”の嚆矢とされがちなアリストテレスは、生きものを自動人形 (automata) などに喩えている。また逆に、生命現象の把握で特殊原理を措定するのは“生氣論者”に限ったことでもない。デカルトその人が「理性靈魂」(âme raisonnable) や「火の熱」(chaleur de feu) を、『人間機械論』(1747) で知られるラ・メトリーは「発動原理」(principe moteur) を、それぞれ措定している。つまり、諸論者にはいずれの成分も含まれており、それゆえ、彼らの所説を子細に検討したなら、「○○○は機械論者でも生氣論者でもある」という言わずもがなの結論に陥ることになる。

第三は、「機械論対生氣論」図式では、時代ごとの両論の異同がわかりづらいうえに、とりわけ生命観の一大転回が看過されてしまうことである。管見によれば、生命観の一大転回は 17 世紀の科学革命期に生じたのではない。もとより科学革命とは、物理学・天文学の展開に焦点を当てた歴史認識なのであり、生きものに関する学の大転換は 18 世紀末からの約 80 年間で起こったのである——この点が本発表の眼目のひとつになる。

第四は、日本に特有な問題かもしれないが、《vitalisme》を「生氣論」とする翻訳が誤謬であり、少なくとも《vitalisme》の本質を見誤らせてきたことである。たとえば「精気」に対応する原語としては《pneuma, spiritus, esprit(s), spirit(s)》などが存在するが、「生氣」に対応する原語も実体も存在しないからである。しかも、《vitalisme》の《vita》とは「生命」のことであり、そこには実体的な「気」の意味はひとまずは含まれていないからである——紙幅の制約のため理由は割愛するが、「生命性論」「生命至上論」などとすべきである。

本発表では、以上の問題意識を前提として、科学的生命観の歴史を新たな視座から再構成する。すなわち、生命現象とその知覚不能な背後“世界”に関する認識論を基軸として再構成する。それによれば、科学的生命観は 18 世紀末葉から一大転換を遂げた。しかし、本質的にはそれ以前のものとは変わっていない。古代から今日まで科学（自然学）が探究してきたのは、生命（生きていること）そのものではなく、生命の生成（現象）の仕方や元（陰象）に他ならないのである。その意味で科学は、「存在忘却」ならぬ「生命忘却」を 2600 年間にわたって続けてきたように思われる。科学が生命そのものを探究してきた心算であるならば、科学は当初より道をまちがえてきたのである。哲学は、わけてもハイデガー哲学は、この要諦を踏まえるべきではないだろうか。